

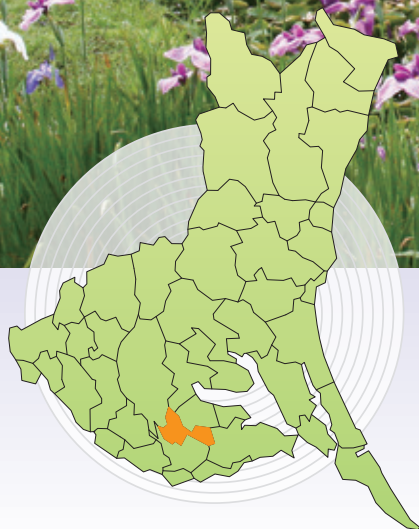
支店長のわがまち紹介

第10回

茨城県牛久市

スローシティの実現でさらなる人口増加を目指すまち

観光アヤメ園 写真提供：牛久市



茨城県内の44の市町村を、それぞれにゆかりのある筑波銀行の支店長がご紹介します。第10回目は、牛久市です。筑波銀行は、“地域復興支援プロジェクト『あゆみ』”に基づき、各自治体との連携を深め、関連を強化して信頼関係の醸成を進めることによって、平成26年4月現在、9つの自治体の指定金融機関業務を取り扱っています。牛久市からは、昭和54年4月1日より2年輪番制による指定金融機関の指定を受託しました。

牛久支店長の内田善明が、牛久市副市長 野口憲氏、市長公室長 川上秀知氏、市長公室次長兼政策秘書課長 吉川修貴氏、牛久市教育委員会次長 川井聡氏（取材当時建設部都市計画課長兼まちづくり推進室長）、経済部商工観光課長 吉田将巳氏にお話を伺いました。

●牛久市が一番と考えていること、自慢できることはなんですか。

牛久市は茨城県内のJR常磐線沿線の市のうち唯一人口が増加し続けている市です。市内には牛久駅とひたち野うしく駅の2つのJR常磐線の駅があり、東京まで50km、1時間弱の好立地で、東京のベッドタウンとして人口増加を続けてきました。

牛久駅を中心に市街地ができ上がり、その後、昭和60年開催の科学万博の際の臨時駅だった万博中央駅の跡を利用して、平成10年に牛久市とUR都市開発機構がひたち野うしく駅を共同で開業し、URによる新しい市街地開発が進んでいます。牛久市は駅を中心に開発が徐々に進み、だんだん人口が増加していきました。市街地が徐々に広がっていったため、市街地が広くまとまっていることも、これからの開発に有利な点です。

牛久市は「スローシティ^{※1}」の実現を目指しており、子育て日本一を方針の一つとしています。市街地の開発の進捗に合わせ、子育て支援を実施してきました。その相乗効果で若い世代を中心に多数の人が移住して来て、人口増加の傾向は続いています。学校の新設や増築の必要も出てきて、市としては嬉しい悲鳴をあげているところです。

ひたち野地区では保育園の充実を進め、1,900人の園児の受入れが可能となりました。小学校、中学

校の増築、新設も進めています。学校は茨城県産の木材を多用した内装にリフォームし、グラウンドには全面に芝を植えました。グラウンドに芝を植える作業は、学校や市の職員、保護者がボランティアで行いました。新設のひたち野うしく小学校には温水プールを設置し、体育館とともに市民に開放しています。

スローシティ実現のための方針として、化石燃料に頼らない持続可能な資源を使って循環可能な社会を構築するバイオマスタウン構想も掲げています。牛久市は豊かな大地と水に恵まれ、気候も温暖なので、かつては農業が盛んでした。しかし、農業従事者の高齢化や後継者不足により耕作放棄地が目立つようになりました。市が100%出資したうしくグリーンファーム株式会社が耕作放棄地を菜の花畑や小麦畑としてよみがえらせ、収穫物を学校給食で活用しています。学校給食や家庭の廃油からバイオディーゼル燃料(BDF)を製造し、牛久市コミュニティバスかっぱ号や公用車の燃料にしています。間伐材、剪定枝、廃材等をペレットに加工し、ペレットストーブの燃料に利用する計画です。すでに市役所ロビーにもペレットストーブが置かれ、浸透に一役買っています。

かっぱ号は、朝夕に電車通勤者のための「通勤ライナー」を運行していることが特長です。利用者は口コミで徐々に増加し、今では立っている乗客も出るようになりました。現在も、乗客増加のために、

※1 効率性や利益優先の考えから脱却し、調和と共存を重視したまちづくり。ちょうどよい人間サイズの規模で、人への思いやりや環境への配慮を進めていくこと。市民が郷土に愛着を持ち、ゆとりを持った暮らしの中で趣味や生きがいを楽しむことのできる、心地よい、ずっと住みたいまちを目指すこと。（牛久市ホームページより）



野口副市長



川上市長公室長



吉川次長



川井次長



吉田課長

運行ルートから停留所の標識の置き方まで常に検討を続けています。

観光は、隣の阿見町のあみプレミアムアウトレットから牛久大仏、シャトーカミヤを訪れる人が多いです。牛久大仏は平成5年に建立され、20周年を迎えました。また、平成26年は浄土真宗の開祖親鸞上人が関東に来て800年の記念の年で、5月31日～6月1日にご開帳記念のイベントを行います。牛久市は近隣の市町村と共同で物産店を開催し、市内の20店舗ほどが出店します。牛久市ゆかりの稀勢の里関も来てくれます。

イベントや文化・芸術活動にも力を入れています。牛久市で最大の集客を誇るイベントが7月最終の土日のうしくかっぱ祭りで、2日間で23万人もの人出があります。牛久市に古くから住んでいる住民と、新しい住民との交流を目的に始まりました。ひたち野地区の人口増加を受けて、初心に帰って住民同士の交流が進む充実した内容になるよう準備しています。

5月3日に行われるうしく鯉まつりは鯉のぼりの下でさまざまなイベントが開催され、魚のつかみ取りに備えて水着でやってくる子供たちもいて、主催者もその意気込みに応えるため張り切っています。11月3日に行われるうしくWaiワイまつりは、農業、工業、商業従事者と消費者が一体となって行う産業祭です。開催日が決まっているため、他の市町村からも集客があります。

小川芋銭展とビエンナーレうしくを交互に開催しています。平成26年はビエンナーレうしくです。5月24・25日に公開審査会を行い、6月29日～7月13日に展覧会を実施します。公開審査は全国的にも珍しく、透明性がある審査方法として芸術家の登竜門となっています。大賞は300万円で、作品は牛久市が譲り受け、大切に保管しています。

●筑波銀行との関わりのなかで得られた成果、期待することについてお聞かせください。

指定金融機関は市政に大きな役割を果たしています。行政と民間企業の双方に綿密に関わっているので、双方をつなぐ接点の役割を担っています。行政が直接知ることが難しい経済情勢等、世の中の生の情報ももたらしてくれます。その情報は、施策立案の参考になっています。震災の際は、風評被害の

実態をいち早く知らせてくれました。今後も、密接な情報交換を期待しています。

●今後の展望を教えてください。

東西に長い牛久市の北側を沿うように圏央道が建設され、市の周辺にインターチェンジが3つ設置されます。平成26年4月12日に千葉県の神崎ICまで開通しました。この先、東関東道と接続すれば、成田空港、鹿島港も近くなります。圏央道による各地へのアクセスの向上には大いに期待しており、牛久市の利便性を宣伝し、市内の2カ所の工業団地を拡大し企業誘致を進めます。すでに、ホギメディカル、太田胃散の工場増築が決定しています。

牛久市は「ムリ、ムダ、ムラをなくす」という市長の方針により、職員全員が発想を豊かにし、あらゆる合理化を進め、行財政改革を行い、必要な事業は実施しながらも市の借金を減らす努力をしてきました。また、さらなる効率化のためには、広域連携の推進が非常に効果的だと考えています。現在も、斎場、消防、し尿処理、水道事業等の広域事業を推進しておりますが、なお一層の推進が必要と考えています。

市内の住宅団地は、民間のデベロッパーによって昭和35年頃から牛久駅の西側から開発が始まりました。新しい住宅団地に人が移り住んだ市街地の弱点は、高齢化が一挙に進むことです。開発から40年以上経過したため住民の高齢化が進み、空き家も増加しました。住民を中心にまちづくり協議会が設置され、今後の牛久市の住宅開発のモデル事業となる再開発が検討されています。初期に開発された市街地は一区画が40～50坪と狭いことから、一区画100坪程度への区割り変更や、歩行者専用の緑道の設置等、「まちのリフォーム」と称して、今後、牛久市に移ってくる若い世代の、特に女性に魅力に感じてもらえるまちづくりを目指します。ターゲットを女性にしたのは、住宅の最終決定権は女性にあることを、長年のまちづくりの施策の中で何度も目にしてきたからです。

平成25年12月、イタリアのグレーヴェ・イン・キアンティ市と友好都市を締結しました。同市のスローシティ運動を取り入れたまちづくりをお手本にスローシティの実現を進めます。そのための子育て日本一の施策、バイオマスタウン構想を引続き推進していきます。

(文責：筑波総研株式会社 主任研究員 國安陽子)